

影は銀色

武太瑛瓏

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

元々は別なタイトルの短編集に含まれていた小説ですが、こちらへ移動させて頂きました。

正直、削除しようかとさえ思った作品なので、期待はなさらないでください。

テーマは“子どもの頃の思い出”といったところでしょうか。

登場人物の性別は、敢えて曖昧にしています。

語り手が男性で相手が女性なのか、はたまた、その逆か。

二人の関係は友情なのか、恋愛なのか、あるいは同性愛的な関係なのか。

その、どれでもないようで、どれでもあるかも知れません。

性別も判らないラフなタッチのスケッチのような画を浮かべていただけたらと思います。

目次

前編：閏年のあの日	1
中編：ゆきんこ	10
後編：影は銀色	22

前編：閏年のあの日

マーちゃんと初めて逢った日のことは、よく覚えている。

マーちゃん、という呼び名は、もちろん本名ではない。

本名をもとにした愛称でもない。

出逢ったとき、あの子は沢山の「ゆでたまご」を持っていた。

ホントに沢山、ゆでたまごだけを、だ。

それを「さあ、食べて食べて」とばかりに私へ振る舞ってくれて、あの子自身も凄く美味しそうにパクパク食べていた。

ゆでたまごだけを。

とつても幸せそうに、うつとりと陶醉しながら食べていた。

その様を見た私が、面白がつてあの子を「タマゴちゃん」と呼び始め、それがいつの間にか「マゴちゃん」、「マーちゃん」という風に変わっていったというわけだ。

自分で名付けておいてなんだが、些か面妖な変遷だったと思う。

たまごが由来の愛称なら「タマちゃん」とでも呼んだ方がまだ自然だろう。「マーちゃん」では、なんだかキウリのお漬け物みたいだ。

だから、けっこう後になつてから、試しに「タマちゃん」と呼んでみたこともあつたけれど、

「やめてよ、ネコじゃないんだから」

と、あえなく本人にボツにされてしまった。

実は、私があの子を一目見た瞬間、「ゆきんこ」と呼んだのを覚えている。意識せず、思わず出た呼び名だった。

その呼称も本人に即座に却下されたのだけれど、私があの日、あの公園に来るまでに、見たり聴いたり嗅いだりしてきたことや、あの子と出逢つたときの状況、本人の第一印象などから、雪の精霊「ゆきんこ」の名は自然に発せられたものだった。

私の記憶の中で、いちばん最初の閏年うるすどしの二月二十九日。

幼稚園の卒業と小学校への入学を控えて、小さな胸に大きな不安を抱えていた頃。

あの日のことは今でも鮮明に思い浮かべられる。

もうすぐお別れの幼稚園の先生が、

「今日は四年に一度のうるう年だから、二月が二十九日まであるのよ」

と教えてくれたことと、その時期にしては珍しく雪が積もったこと、そして、帰ってから親と大喧嘩して家を飛び出したことなどと、印象的な出来事が多かったためだろう。

親との喧嘩の理由は覚えていないが、どうせ些細なことから始まったのだと思う。

所謂、反抗期だったのだろう。

家から脱走した私は、足下の雪を乱暴に蹴り飛ばしたり、道端に作られていた雪だるまに丸めた雪を投げつけたりしながら、ただひたすら、町をさすらっていた。

後ろから怒った家族が今にも追いかけて来そうで、とにかく、できるだけ遠くまで逃げたかった。

どのくらい歩き回っていたのかは判らない。

ふと気がつくとき、見知らぬ静かな住宅街の中にある、見知らぬ小さな公園の前にいた。今になって考えれば不思議なことなのだけれど、大抵こういう雪の積もった日には、公園は子供たちの恰好の遊び場となり、あの時間帯には、もう既に無邪気な小鬼たちに蹂躪されていそうなものだけれども、その公園の雪は、朝から誰にも足を踏み入れられていなかったのか、まっさらな状態を保っていた。

そういうえば、私がここへ来てから一人の人間にも会っていない。これもやはり、今思

えば不可解な話である。

しかし、あのときの私は、そんなことは気にすることもなく、目の前一面に広がる、白いふわふわの絨毯じゅうたんが敷き詰められたような幻想的な光景に、ただただ魅入っていた。

雪の匂い。

森しんとした静けさ。

純白の絨毯。

ジツと眺めているうちに、目がチカチカしてきた。

雪は、あの頃の私の足首くらいまで積もっていた。地面はもちろん、ベンチやブランコ、ジャングルジムや鉄棒などの遊具の上にも。

よくこんな細い形の物の上にまでのっかっているものだと、公園の入り口の手すりに積もっている雪に触れると、ひと塊の雪がパサツと落ちて、下の雪に呑みこまれた。

真っ白な上に真っ白なものが落っこちたものだから、宛さなら雪原の白兔のように一目では判りにくかったけれども、よく見ると控えめな凹凸さなと陰影ができていた。

まっさらな白だったところへ小さな変化が生まれたことが、子どもの私を何故か少しドキツとさせた。

公園の中に視線を戻すと、目が慣れてきたのか、園内にも、そんな凹凸や陰影があることに気がついた。向こうに見えるのは、おそらく砂場だろう。なんだかモコモコして

て、雲みたい。

——あの砂場の方まで行ってみよう。

唐突に私はそう考えた。

とはいえ、これだけきれいに敷かれた白い絨毯に第一步を踏みだすのには、少し憚りを感じた。美しく整えられた庭園を汚すみたいで。

じゃあ、出来るだけ足跡をつけずに砂場まで辿り着くには、どうすれば良いか——
幼い頭なりに思考した結果、なるべく敷地の隅っこや、地面から離れた高いところを
伝つて、目的地まで進んでいくことにした。

今となると、何故そんな考えに至ったのか、自分でもワケが判らない。

ともかく私は、ひとまず公園の入り口を離れて、道路上を公園の端にあたる位置まで横に移動した。

そこには、この公園を囲んでいる、太い針金を組まれた柵があり、それ越しに公園内を見れば、蓋のない側溝が、園内を縁どるようにのびていた。側溝の中には水はないよ
うで、底に雪を少し溜めていた。

私は柵に手を掛けてよじ登り始めた。

幸い荆棘線ではなかったので、針金が手に刺さる心配はほとんどなかった。

むしろ、子どもの小さな手なので、指や

足を掛けやすく、猿みたいにスイスイ登れた。

割と、こういうことをするのが好きな子どもだったのだ、私って。

なんだか怪盗かスパイにでもなったような気分で、ちよつとワクワクしていた。

この瞬間を大人に見られたら、きつと叱られるのだろうな、なんて考えながら。

調子にのつて柵のてっぺんまで辿り着いて漸く、若干の恐怖感を覚えた。

大人にとつては大した高さではなくても、小さい子どもにとつては、まるで鉄塔の頂上のようなだった。

それでも、こういうことをするのに慣れていた私は、柵のてっぺんをまたいで公園の内側へ体を入れ、柵を降りていった。

そして、ある程度の高さまできてから、

「えいっ」

側溝に向かって飛び降りた。

着地の瞬間、ズルツと足が滑りそうになったが、なんとか持ちこたえた。

危ない危ない。

そのまま側溝を通路代わりにして、しばらく進み、ベンチのあるところまで到着。

自分の位置から、ベンチと目的地の砂場が一直線に見えた。

私の計画はこうだった。

まずは目の前のベンチに飛び移り、そこから跳んで砂場へ着陸する、というもの。我ながら本当に向こう見ずなガキだった。

もし今の私がある場にいたら、

「そんな危ないことはやめなさい！」

と、絶対に止めただろう。

しかし、そこは無人の公園。

誰もこの無謀な作戦を止める者はなく――

「ほっ」

私は、短い手を精一杯のぼして、ベンチの背もたれに両手を掛けると、そこを支点にして跳び箱のようにジャンプし、ベンチの座席の上に着地した。

危険なアクロバット。

ただでさえ、失敗したら大怪我の恐れがあったうえに、そのときベンチは雪で滑りやすくなっていたのだから、下手したら大惨事だった。

しかし当時の私は、自分の運動能力に割かし自信を持っていた。幼さゆえの過信、自惚れだった。

その頃、通っていた幼稚園で、仲間内で通称「ヒコーキ」と呼ばれた危険な遊びが

流行はやっていた。

鉄棒の上に足を広げて乗り、両足の真ん中で鉄棒をつかんで、ぐるんと回転し、その遠心力で飛ぶという恐ろしい曲芸。

それが私の得意技だったのだ。

まだ体が柔らかく身軽だったからできた芸当だろう。

子どもというものは、時々こうして怖いもの知らずなことをするから怖い。

——因みに、後のちにその幼稚園で「ヒコーキ禁止令」が發布されたのは、また別な話である——

それはさておき
閑話休題。

私は、ベンチの上に立って深呼吸をした。まるで何かの競技の選手の気分。はたして、自分の跳躍力で、このベンチから砂場まで上手く飛び移れるか。両足に力を込める。

そして、溜めた力を解放するように、思いっきり跳ぶ——

バフン。

……。

跳びすぎた。

私は、砂場に着地というよりもダイブして、雪にうつ伏せで埋まってしまった。

公園の外から見たときにはフワフワして見えた雪は、砂場なのだから当然、その下に大量の砂を埋蔵していたわけで、私は、期待していたフワリとした肌触りではなく、不快なジャリジャリした感触を全身に受けていた。

口の中で、雪と氷と、砂と泥の混じった変な味がする。

急に、自分のしたことが恥ずかしく思えてきた。

空しかった。

せめて、誰にも見られていなくて良かった——

そう思ったときだった。

「何してるの?」

どこか呆れたような声とともに、銀色の影が目の前に差してきた。

《つづく》

中編：ゆきんこ

おバカな遊びで雪と砂に埋められるという大失態を犯した間抜けな私の横に、誰かが立っている。

顔を上げると、一人の子どもが、心配そうに私を見下ろしていた。

歳は、当時の私と同じくらいだろうか。

随分と色白な子だ。

頭に毛糸の帽子をかぶり、背中にリュックサックを背負っている。

「だいじょうぶ？」

気遣わしげに声をかけてくる。

こういう場面では、まずは挨拶を返さなければならぬことは、幼かった私だっけ知っていた。

そうなんだけど、あのとときの私は、初めて会う人に、こんな恥ずかしい格好を見られたからか、あるいははその子の、雪から生まれてきたみたいなの白い肌の色に魅入ってしまったからなのか、とにかく少々動揺していたみたいで、

「ゆきんこ？」

と、思いつきり場違いな返答をしてしまった。

予想外の言葉を受けて戸惑ったのか、その子は一瞬だけ目をまるくしたが、すぐに顔をほころばせて「ハハハ」と笑った。

「なーに、そのユキンコって？」

「あ、ゴメン。だいじょうぶ」

私はなんだか照れくさくなって、目をそらして体を起こそうとすると、その子は手ののばして手伝ってくれた。

起きあがってから自分の埋まっていた跡を見てみると、まるでマンガみたいのに、人の形の窪みができていて、それがまるで私の間抜けさを形にして見せつけているようで、あらためて恥ずかしくなる。

地面に、私たち二人の影がさしている。

日中の真つ白な雪の上にある影だから、少し銀色っぽい、不思議な色の影だった。

その子は、私の服に付いた雪を払ってくれながら、

「で、ホントにだいじょうぶ？ ケガとかしてない？」

と再び訊いてきた。

初対面の子に体を触られることに慣れていなかった私は、「いいよ、じぶんでやるか

ら」と、その手——色白な見た目と違って暖かい手——をやるわりと制した。

「ホントにだいじょうぶ。ありがとう、もういいから」

「それならいいけど、なにやってたの?」

「ちよつと、ぼうけんしてたんだ」

「ふうん」

その答えに納得したのかしなかったのか、その子は公園内に残された、私の通過した跡を見ていたが、

「ゆでたまご、たべる?」

と、唐突に訊いてきた。

「え?」

「ゆでたまご。ウチからもってきたんだ。いっしょにたべよ、ね」

その子は私の手をひいて、先ほど私が足場に使ったベンチまで来ると、背中のリュックサクをおろし、中から小型のワイパーみたいな道具を出して、その柄を伸ばして、ベンチの上に積もった雪を払い落とし、用の済んだワイパーを縮めてリュックにしまい、今度はビニールシートを取り出して広げて、ベンチの上に敷き、私の方を向いて、「どうぞ」とでも言うように手のひらで示した。

それに従って私がベンチに座ると、その子も私の隣に腰かけて、膝の上にリュックを

乗せて何かガサガサやっていたが、やがて中から、おにぎりがいっぱい入ってそうな感じに膨らんだ紙袋を発掘して、その紙袋から、アルミホイルに包まれた塊を何個か取り出した。

私はそれを、「いろんなものが出てくるなあ」「妙に用意がいいな」などと変なことに感心しながら眺めていた。

「はい」

私にアルミホイルの包みが二つ手渡された。

「たべなよ。もうさめちやつてるかもしれないけどね」

「なんで、ゆでたまごなの？」

「たまご、ダメ？」

「ううん、そんなことないよ。じゃあ、いただきます」

アルミの包みを一つ開くと白いゆでたまごが入っていた。

すこしかじってみる。

うん、おいしい。

冷めてるかも知れないと言われたが、まだほんのり暖かい。

「なんで「ユキンコ」なの？」

自分の分のゆでたまごの包みを開きながら、その子はまた唐突に訊いてきた。

いつも唐突な子だな。

「え？」

私の返事も、先ほどの繰り返してみたいな間の抜けたものになる。

「さつきあつたときに、そういつてたでしょう？」

「ああ……」

忘れていた。

そういえば私は、会つて早々この子を「ゆきんこ」と呼んだのだった。

私は「ゆきんこ」について説明することにした。

とはいつても、詳しいことはよく知らない。

今日みたいに雪が降つた日に道端で遊んでいたら、近所のお婆ちゃんに「おやまあ、まるで『ゆきんこ』だわい」と言われて、親や幼稚園の先生から「雪ん子」という雪の精霊みたいなものだということを教えてもらったくらいである。

「ふうん、ユキンコねえ……」

「イヤ？」

「ちよつと」

「そう……」

どうやら「ゆきんこ」という愛称は、この子のお気に召さなかつたようだ。

なんか気まずい雰囲気で、しばらく二人で黙ってゆでたまごを食べる。

「たまご、もつとたべる?」

沈黙を破って、隣の子が訊いてきた。

気づけば、その子はもう三つ目の包みを開いている。私はまだ一つ目を食べているというのに。

塩もつけず、飲み物もなしで、よくそのペースを保てるものだ。

「おいしいんだけどもね…」

「ん?」

「たまごだけ?」

「うん」

当然のように応え、至福の表情でゆでたまごを頬張る、たまごちゃん。

そうだ、この子のことを「タマゴちゃん」と呼ぼう。

結局、私はゆでたまごを何とか二つ、タマゴちゃんは少なくとも五つは食べて満足してから、二人で夕方まで遊んだ。

タマゴちゃんは、その変な愛称にも「えー」って反応をしていたけど、私が何度か呼ぶうちに慣れてきたみたいで、そのうち「マーちゃん」で定着した。

因みに私は、いつの間にか「シヨーン」と呼ばれていた。ゆでたまごを食べていたときに、口がパサパサして塩が欲しくなつて、やたらと「しおないの？」と訊いていたかららしい。

私たちは遊んだ。

雪に絵を描いたり、雪だるまをつくつたり、二人だけの雪合戦をしたり。

夢中で遊んだ。

市内に午後五時を知らせる音楽がスピーカーから流れ始めた。ドヴォルザークの交響曲第九番第二楽章——私にとっては当時も今も「遠き山に日は落ちて」——を聴いた途端、ようやく我に返つた。

まずい。

「あ、もうこんなじかん。かえんなきゃ」

そう言つて雪だるまへの飾りつけの手を止めたマーちゃん、私の顔を見て少し驚いたようだった。

「どうしたの、そんなカオして？」

「みちがわからない」

「ん？」

「ウチへのかえりみち、わからない」

「へ？」

マーちゃんの目がまん丸になる。

私は、ここまで辿り着いた経緯をマーちゃんに話した。

「わ、そりゃ、こまったね」

「マーちゃんちは、このへんなの？」

「うん。シヨーンンは？」

「ウチ、けつこうとおくからきたんだ」

「そうなんだ…」

マーちゃんは、しばらく何か考えていたみたいだったが、顔を上げ、

「そうだ、デンワして、むかえにきてもらいなよ」

「でんわ？」

「ちよつとまってて」

マーちゃんは、自分のリュックから小銭入れを取り出し、中から十円玉を二枚つまんで渡してくれた。

「ほら、これあげるから、そこのデンワからかけなよ」

マーちゃんは、公園内に設置されていた公衆電話ボックスを指し示した。

その頃、私は携帯電話を持っていなかったのだ。

マーちゃんと一緒に電話ボックスに入る。

小さかったから、二人でも余裕な空間。

私は恐る恐る、家へ電話した。

案の定、凄く叱られた。

場所を訊かれて困っていたら、横からマーちゃんが公園の名前を教えてくれた。

親は、すぐに迎えに来ると言ってくれた。

電話ボックスを出てから、マーちゃんはちよつと悪戯っぽい顔で訊いてきた。

「おこられた?」

「うん、すつごく」

「かえりたくない?」

私は、ちよつと迷ってから首を振った。

それを見て、マーちゃんはニカツと笑った。

マーちゃんは、親が来るまで一緒に待っていてくれると言ったけど、私がそれを断つた。

「いいよ、マーちゃんも、はやくかえらないとマズいでしょ？」

マーちゃんは、それなら一度家に帰って、親と一緒に戻ってくるとまで言ってくれたが、それも断った。

当然、こんな時間に幼い子供ひとりが公園にいるなんて、この物騒な世の中では危ないことだと、今の私は思う。

当時だつて、ひとりぼっちで待つことは、とても心細かった。

闇への恐怖心は、子どもの方の方が圧倒的に強い。

だけれども、マーちゃんの家族にも悪いし、それに、自分の家族を見られるのが恥ずかしい気持ちだが、私にそうさせた。

もしかしたら、ほかに別な思いもあつたかも知れない。

「じゃあ、かえるね」

「うん、ゆでたまご、ありがとうね。あと、でんわのことも」

「いいよいいよ、たのしかったから」

「ほんと、たのしかったね」

「また、いつしよにあそぼうよ」

「うん、またあそぼ」

手を振ったマーちゃんが、こちらに背中を向けて歩いていく。

私は、それをずっと見送っていた。

角を曲がるところで、マーちゃんは振り返って、また手を振って、やがてその姿は見えなくなった。

それとほぼ同時に、背後で車の停まる音がしたので私はビクツとなった。

子どもが車で誘拐されるのは、あの頃の私でも、テレビのニュースやドラマで見たことがある。

逃げようと思って、半ば駆け出すような体勢になったところで、聴き慣れたクラクシヨンの音がした。

振り返ると、我が家のボロ自動車が目の前で停まっていた。

小さかったあの頃の私にとっては、随分と歩いてこの公園まで来たつもりだったのだけれども、実際には、家から車で五分程度しか懸からない距離だったのだ。

そして、幼い私が小冒険して見つけたこの公園も、小学生になってからは、お馴染みの場所となる。

成長するにつれて、この町も小さくなり、家とこの公園との距離は、どんどん近くなっていった。

マーちゃんとは、すぐに会えるかと思って、この公園へもたまに来ていたのだけど、そ

の後の数年間、会うことはなかった。

距離的には家が近くても、学区外だったのだ。

それでも、近所なのに会えないのは不思議だった。

私がマーちゃんと再会するのは、更に数年後の春。

二月二十九日のことである――。

《つづく》

後編：影は銀色

ああ、ツイてない…。

道中、何度もため息をつきながら、その日の私は、学校からの帰り道にある川の堤防の上を、タイヤのパンクした自転車を曳きながら、トボトボ歩いていた。

あと幾日も残さず今の高校を卒業し、来年度から地元を離れて、新しく通う大学で寮に入る事が決まっていた私は、これからの新生活への不安を抱えていた。

通えないこともない距離にある大学だったけれど、一度あの家を出てみたかった私は、入寮を希望した。

合格が決まったときは嬉しかった。長く苦しい受験勉強から脱出できたことを、素直に喜んだものだった。

しかし、生まれて初めて実家を出て、地元を離れる日が近づいてくるにつれて、次第に心細くなってきた。

新しい環境に馴染めるだろうか？

友達は出来るだろうか？

寮の仲間とはうまくやっていけるだろうか？

…などといった心配ごとが生じ、それが胸の中で日毎ひごとに膨らんで増殖していき、心の落ち着かない日々を送っていた。

眠れない夜も多かった。

その日は閏年の二月二十九日だった。

例年より一日だけ多いことで、少しは猶予が与えられたような気がした日だった。

そんなところへ、この自転車のタイヤのパンクだ。

もうすぐ家に着くというところだ。

自転車ではもうすぐの距離でも、徒歩ではけっっこうな道のりになる。

心こころな做しか、曳いている自転車が少し重くなったような気がしてきた。

ハア……。

俯きながら何度目だか判らないため息をついて、顔を上げたときだ。

向こうから自転車が走ってくる。

私は、徐々に近づいてくる自転車に乗った人物を見ているうちに、何か不思議な感覚になってきた。

あまり人をジロジロ見では失礼だし、変な人だと思われるかも知れない。

しかし、その色白な顔を見ていると、胸の奥底から、何かがこみ上げてきた。何か、とても懐かしいものが。

自転車の乗り手は、怪訝そうに私を見ながらすれ違う。

その姿を追って私が振り返ると、自転車のブレーキ音がするのは、ほぼ同時だった。

見ると、その自転車の乗り手も、こちらの顔をまじまじと注視している。

「あの……」

「えっと……」

二人の声が重なる。

「あ、先にどうぞ」

「いや、そちらこそ」

なんだか道の譲り合いみたいになっている。

お互いに、記憶の深い所を探っているのか。

「じゃあ……」

相手は姿勢を正して訊いてきた。

「ウチらって、どこかで会ったことない？」

「やっぱり、そう思う？」

私の反応を見て、相手の目がまん丸に見開かれた。

その目を見て、私の中でぼんやりと揺らいでいた面影が、一気に鮮明になって蘇った。

「マーちゃん!？」

「シヨーン!」

私たちは駆け寄って、お互いの肩を叩き合った。

「そうか、シヨーン、この町を出て行くんだ……」

あの懐かしい公園のベンチに腰かけて、私たちはお互いの近況を語り合った。

マーちゃん持参のゆでたまごを食べながら。

この人、まだたまごを持ち歩いてたんだ。

公園の遊具は、ペンキが塗り替えられていたり、補修されていたり、撤去されているものもあって、若干、様子が変わって見えた。

あのおきお世話になった電話ボックスも消えていた。

一番思ったのは、みんな小さくなってしまったこと。

もちろん、私たちが大きくなったのであって、公園が小さくなったわけではない。

そうだとしても、あのおき、おっかなびつくりで登った柵が、自分の背丈程もない、可

愛らしいものに見えるようになったことは感慨深かった。

「出て行くつていっても、そんなに遠い所じゃないんだけどね」

「なら、会おうとすればいつでも会えるわけだね」

「うん。今度こそ、お互いの連絡先を知っておこうよ。前に会ったときには、そんな暇なかつたものね」

マーちゃんと連絡先を交換しあつてから、私はしみじみとした心持ちで呟いた。

「こうしてみると、マーちゃんも生身の人間なんだな、つて思うよ」

「ハア？ 何それ、どういうこと？」

「いや、だつてね、マーちゃんと会つたのは、閏年に雪が降つた日だけで、それつきりだつたから、子どもの頃は、マーちゃんは閏年の雪の日にしかな現れない精霊だったのかな、なんて思つたこともあつたんだ」

「そういうえば、最初に会つたとき『雪ん子』がどうの、とか言つてたね」

「覚えてるの？」

「忘れっこないよ」

「うゝ…」

「ふふふ…」

私の反応をからかつて楽しそうに笑っているマーちゃん。思っていたよりも元気そ

うだ。

そんなマーちゃんを見て、私は思い切って訊ねてみた。

「ねえ、身体の方は大丈夫なの？」

前に会ったとき——私の覚えている二度目の閏年で、最初と同じく雪の積もった二月二十九日——に、マーちゃんは私に、自分の体について話してくれた。

マーちゃんは生まれつき体が弱く、あまり家の外に出ることもなかった。

学校にも、ほとんど行けなかったらしい。

家族が滋養強壯の為に“ゆでたまご”を作ってくれ、それがマーちゃんの好物になった。

天気の良いかな日にしか外へ出させてもらえなかったが、それでも、季節はずれの雪が降ったりした日なんかは、子供らしく外で遊びたくてしょうがなくなくなる。

そこで、家族に特別に許可を貰って、たまに近所の公園への外出を許してもらった。

好物のゆでたまごを持たされながら。

そんな日に、私はたまたま、マーちゃんと出会えたのだ。

「大丈夫じゃなさそうに見える？」

マーちゃんの言葉に、私は首を振った。

相変わらず色白だけど、病弱そうには見えない。

マーちゃんは、私にはお馴染みのニカツとした笑顔を見せた。

「良い先生がついてくれてね、長い間ゆっくりとりハビリしてきて、もうすっかり元気だよ。今では、普通に生活したり、ちよつとしたスポーツくらいなら全然やつてもOK だつてさ」

「そうなんだ!」

私は本心から祝福した。

マーちゃんは誇らしそうに、そして少し照れくさそうに笑った。

「それにしても…」

私はしみじみとした気持ちで言った。

「…なんだかこの二人つての関係つて奇妙だよな。小さい頃に少しだけ、それもかなり時間をおいて会ったつきりなのに、こうして普通にしゃべっているんだもの」

「そういえばそうだね」

「マーちゃんと初めて逢った日は特別な日だったから、春になる度に浮かぶ思い出になつていたけど、マーちゃんは、よくこんな、特徴のない地味なヤツを覚えていてくれたね」

「それって、人のことを遠まわしに変わったヤツだつて言ってる?」

「え？ あ、いやその…」

「ハハ、まあいいよ。そうだね、こっちにとつても、ショーナンは特別な友達だから忘れられなかった、つてとこかな」

「そ、そうなの？」

「うん、たまたま外に出たらできた、知らない学区の友達だったからね」

「そっか」

初めてマーちゃんと会った日から、私はあの公園の一带へは何度か探索に行っていた。もう一度マーちゃんに会えることを期待して。

しかし、そのまま会えずに数年が経過し、マーちゃんと再会できたのは次の閏年の二月二十九日、雪の日だった。

あの日と同じような状況に期待して、私は例の公園へ向かった。

公園の近くまで来ると、一人分の足跡だけが園内へ向かっているのを見つけた。

小さい頃に聴いた童謡のように、足跡を辿れば求める人に会えたりして？——と、その足跡に自分の足を重ねながら歩んでいってみれば、なんと本当に、その先であのマーちゃんと再会できたのだ。

凄く嬉しかった！

その頃には私たちも、前と比べて少しは複雑な話をできるようになっていて、マーちゃんから、体が弱くて、あまり外に出られないことも教えてもらった。

あのとき、マーちゃんの家を教えてもらっておけば良かったのだが、訊きそびれてしまった。

後になってから、随分と後悔したものだ。

その次の閏年、つまり前回の二月二十九日には、雪が降らなかった。

そして、マーちゃんとも会えなかった。

私の中で、マーちゃんが「閏年の雪の積もった二月二十九日にしか現れない精霊」になつた所以である。

時がたち、私の心も変化していくにしたがつて、あのときのことは、次第に現実感が薄れてきて、子どもしか見えない存在、あるいは幼い頃の夢のような気がしてきていた。でも、今はこうしてマーちゃんと会って話している。

雪のない二月二十九日に。

「——それに、シヨーンと逢つたときのインパクトだつて強烈だつたしね」
「ちよつと！ それはお互い様！」

あ、やっぱりこの人は現実の人間だ。

ちよっとノスタルジックな想いの中に浸っていたら、マーちゃんが私の恥ずかしい思い出を呼び起こしてきた。

あの、砂場に刻印された人型の窪みは、幼い私に“自業自得”というものを最初期に教えてくれたものだった。

しかし、マーちゃんのゆでたまごを食べる姿のインパクトだって負けてはいないと思う、というか思いたい。

そんな調子で、私たち二人は長い間おしゃべりに耽っていた。

たわいない話から、真面目な話まで。

夢中になって話し続けた。

これまた不思議なもので、会った回数は少ないのに、それはとても居心地の良い時間だった。

マーちゃんに好きな人がいることを知ったときは、何ともいえない妙な気持ちになったものだ。

やっぱりマーちゃんは精霊とかではなくて、普通の人間なのだと思われたような気がして。

いい歳して、何考えてたんだろ、私は。

市内に、ドヴォルザークが鳴り始めた。

「おっと、もうこんな時間か」

「早かったね」

「お互い、だんだんと、時間はたつぷりとは言えなくなってきたからね」

「うん、そうだね……」

「ねえ、シヨーン。どうして、家を出たいと思うの？ どうして、この町を出たいと思うの？」

「え？ うーん……」

私はしばらく考えてみたが、

「わからない」

そんな返事しかできなかった。

「ふうん……」

マーちゃんは、そんな私の答えに納得したのか、しなかったのか、私には判らなかつたが、それ以上は追求してこなかった。

「じゃ、今日はこの辺で」

マーちゃんはおどけて敬礼のポーズをとりながらそう言い、ニカツと破顔した。

私も笑いながら、答礼する。

「あつ、そうだ」

私はふと思いつき、鞆に入れていた財布から十円玉を二枚取り出して、マーちゃんに差し出した。

「なに、これ？」

マーちゃんが目をパチクリさせる。

「最初に会ったときに貸してくれた電話代だよ。前に会ったときに返しそびれちゃつてね、ずっと気にしてたんだ。あれ、かなり助かつたんだから」

「ええ？ いいよ、そんなの。あれはあげたんだもの」

「いいから受け取つて。こっちはこれで、長年モヤモヤしていたことがスッキリするんだから」

「そう？ なら、有り難く頂くよ」

「うん、こちらこそ、ありがとう。ねえ、マーちゃん、今度こそ、また近いうちに会おうよ」

「そうだね、せめて次の閏年の前にはね」

マーちゃんは、そう言う「ハハハ」と笑った。

手を振つて家路を辿るマーちゃんの後ろ姿を、私はずっと見送っていた。

その足下には、黒い影が伸びている。

マーちゃんは、角を曲がるとき、いつぞやのように振り返って、再び手を振り、視界から消えた。

私はしばらく、マーちゃんの消えた角を眺めていたが、やがて、自分の足元の影に目を落とした。

何かの錯覚だろうか。

街灯に照らされてできた私の影は、一瞬だけ銀色に見えた。

《影は銀色：おわり》